

Om P. Sharma先生の思い出

名誉会員 立花暉夫

元・国際サルコイドーシス会議理事長Om P. Sharmaは2012年に逝去された。

私が彼に最初に会ったのは、1969年私がチェコのプラハでの国際サルコイドーシス会議においてサルコイドーシスの肝病変について、腹腔鏡肝生検陽性症例を発表後、ロンドンで、当時国際的にサルコイドーシスのtop leaderだった故D. G. Jamesが院長の、ロンドン大学関連病院のRoyal Northern Hospitalにおいてであった。彼は当時residentであり、resident roomで私はサルコイドーシスの脾病変によるSplenic Ruptureのcase reportの別刷をいただいた。彼はロンドンでの生活の後に、アメリカLos AngelesのUniversity of Southern Californiaの内科教授として教育、研究生活に入り、サルコイドーシス研究から、1984年Butterworths社から*Sarcoidosis: Clinical Management*を出版した。

1975年New Yorkでの国際サルコイドーシス会議前に、私がLos Angelesで彼の大学を訪問した際、彼は共同研究者LiebermanにACE研究のために多くのサルコイドーシス患者血清を送っていると私に語った。私は当時、彼と同様に共同研究者上田英之助にサルコイドーシス患者血清を送っていた。日米で同時にACE研究が実施されていた。私は1975年春、日本医学会総会でサルコイドーシスの教育講演の際に、サルコイドーシスでは血清ACEは高値と報告した。同年秋New Yorkでの国際サルコイドーシス会議でLiebermanは同様の発表をした。

1993年、彼はLos Angelesで、会長として国際サルコイドーシス会議を主催した。私は腹部CTで多発性肝mass lesionを示し腹腔鏡、肝生検陽性のサルコイドーシス症例および家族発生サルコイドーシス症例をまとめて発表した。

別の機会に、私は、彼の依頼で彼の大学の関連病院で、サルコイドーシス肝病変の多数の腹腔鏡写真、肝生検陽性所見を提示し講演する機会があった。

彼には、本学会誌25巻（2005年）に“Effectiveness of infliximab in treating selected cases of sarcoidosis”と

“Interferon-induced granulomatous lung disease”を執筆していただいた。

彼は、Current Opinionシリーズの出版社で隔月発行の雑誌*Current Opinion in Pulmonary Medicine*のeditorとなっていたが、2008年、ギリシャでの国際サルコイドーシス会議で世界的にも発表がない80歳以上の日本のサルコイドーシス剖検例の私の発表を見て、Tachibana T, Iwai K, Takemura T. “Sarcoidosis in the aged: review and management”を2010年16巻に書かせていただいた。また、私が肺胞微石症の研究者で国内および国際学会で発表を継続し、世界最多の日本症例を収集していることを知り、2009年15巻にTachibana T, Hagiwara K, Johkoh T. “Pulmonary alveolar microlithiasis: review and management”を書かせていただいた。肺胞微石症については、彼の出身国であるインドの代表的出版社から彼が編集で呼吸器病学の単行本を出版するので、私は肺胞微石症についての執筆を依頼され、原稿を送り、メールで病理組織像をカラーで美しく印刷した出版前のPDFが届いた。

彼は、あまり知られていないが、Archivistとしての面があり、世界の古いサルコイドーシス研究者の歴史的資料を沢山持っていて、さらに有名な作曲家、作家がサルコイドーシスであった可能性の話も知っていることを、彼が会長のLos Angelesでのdinner partyで語っていた。

最近、Omを愛する妻Maggie夫人は、Omの死亡前に、彼と親しいサルコイドーシス研究者たちに彼にささげる最近の研究成果の原稿を書かせて、記念献呈本を作成することを考え、私も参加し原稿を送った。Maggie夫人からのメールで、彼が病床で私の送った原稿を喜んで読んでいたと聞き、私はうれしかった。彼の死後もMaggieはZeitschrift（記念出版物の意味）を出版すると私にメールをくださったが、現時点では未着である。

最後に、一言、Privateでは、Om, Maggie夫妻と私たち夫妻は、長い間親しくお付き合いさせていただいたことは、よい思い出である。

愛染橋病院 内科

著者連絡先：立花暉夫（たちばな てるお）
〒556-0005 大阪府大阪市浪速区日本橋5-16-15
愛染橋病院 内科
E-mail：Tachi@zeus.eonet.ne.jp